

WHOの健康の定義の問題点と口腔保健の役割

花田 信 弘

The defects of WHO's definition of health and a role of oral health

Nobuhiro Hanada

キーワード：健康観、世界保健機関（WHO）、健康の定義、幸福、環境への適応

1. はじめに

世界保健機関（WHO）の健康観は完全な健康や絶対的な健康の存在を想定して作成されているが、人間の健康は移ろいゆくものであり、完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態がどこかに存在するわけではない。本来、健康と幸福は個人の環境への適応の程度で決められるものであり、どんなに身体的な健康度が満たされていても、周囲の環境に適応できない人間は、健康であるとも幸福であるとも言えない。逆に、死の床についても周囲の環境や死に臨む自己の環境に満足し適応している人は健康であり幸福な状態であるといえる。この環境への適応力には、話し合いにより周囲と折り合いをつけることが大切である。それには言語コミュニケーションの能力が深く関わっている。口腔保健とは、この言語コミュニケーションを支えるすべての保健医療福祉の技術の総称であり、人間の健康と幸福を公衆衛生の立

場で考えるときに欠けてはならない存在である。

2. WHOの絶対的な健康観

WHOの健康の定義は、公衆衛生の考え方の基本として歴史的な役割を果たしている¹⁾。"Health is a state of complete physical, mental and social well-being, and not merely the absence of disease or infirmity" (健康とは完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない)。これが1946年に発表されたWHO健康の定義（WHO憲章1948年制定）である。WHOの健康の定義は「完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態」という完全で絶対的な健康の存在を想定して、その段階に向かって、健康度が上がるように各国政府の努力を求めたものである。WHOの健康の定義が評価できる点は、それまで健康は主として身体面のみが重視されていたのに対し、健康状態を身体面だけでなく肉体、精神、社会の3面からとらえることである。

しかし、WHOでは国力増強や経済成長といった視点が強く、実際に強調されたのは身体的健康で、その実態は労働者の健康を経済開発に結びつける提案と見ることができる。1978年ソビエト連邦カザフ共和国の首都アルマ・アタにおいて世界中のすべての人々が健康を保持するため迅速な行動が必要であることが宣言された¹⁾。そのスロー

【著者連絡先】

〒351-0197 埼玉県和光市南2-3-6
国立保健医療科学院口腔保健部
部長 花田信弘
代表電話：048-458-6111（内線3208）
FAX：048-458-6288（口腔保健部共用）
E-mail：nhanada@niph.go.jp

ガンは「西暦2000年までにすべての人々に健康を」であった。ここでも物質生産に携わる労働者に健康をもたらし、物質文明を追求するのが主旨だと言える。WHOの完全な健康には様々な慢性疾患に罹患している高齢者は含まれず、精神的及び社会的福祉の状態、すなわち「生命の質」も背後に押しやられてきた。

3. 相対的な健康観

フランス人の医師デュボスは、その著『健康という幻想』の中で、「疾病の問題を解決することは、健康と幸福をつくりだすことと同じではない」と述べ、WHOの健康の定義とは別の方法で健康と幸福をつくりだすことを考察している²⁾。デュボスは、「健康と幸福をつくりだす仕事には、治療薬や治療処置に関する専門的な知識をしのぐ、生物とその環境全体との間をつなぐ関係を、複雑なままに詳しく理解する、一種の英知と洞察力がある」といい、「健康と幸福は、毎日の生活で出会う挑戦に対して反応し、さらに適応する個人的態度の現れである」と相対的な健康観を披瀝している。このデュボスの健康観は、「健康」が自然や社会環境と個人の相対的な対応関係で決まることを述べたもので相対的な健康観である。デュボスは、健康を絶対的存在として、完全な健康状態を追い求めているWHOとはまったく異なる見解である。結局、WHOの健康の定義で述べられている健康は各国政府のための健康であり、対象としているのは各国の経済発展を担う若い工場労働者の健康なのである。

生田清美子は、WHOの健康の定義について、「病気や障害をもっている、元気だし、社会に十分適応して良好に生活していけるのに健康でないということには、多くの疑問が投げかけられる。これらの人々から理想的健康像を奪っている」と批判し、「病気で休んでいる人にも末期医療の中にいる人にも「健康者」にも（中略）相対的によりよい状態としての健康を求めていく」と言っている³⁾。生田の健康観は、デュボスと同様に、「健康」を絶対的なものではなく相対的なものとして

とらえている点で高く評価できる。

デュボスは、また別の著『人間への選択』の中でWHOの健康の定義を批判するように、こうはっきり言っている⁴⁾。「きのうと同じく今日も、絶対の健康ということは一つの幻想にすぎず、われわれはけっして到達できないこの幻想を熱心に追い求めている」。

4. 環境への適応力と口腔保健

デュボスや生田の相対的な健康観を採用すると、人間の持つ環境への適応力こそが、人間の健康と幸福をつくりだすのであり、周囲の環境に適応していると本人が主観的に感じている場合はたとえ重病人であっても健康であることになる。このように、健康は絶対的なものではなく、周囲の環境に適応できているかを尺度として計測すべきものである。健康づくりとは環境への適応力づくりに他ならない。このように考えるとある時に人が健康かどうかは、客観的な状態を熟知した上で、周囲環境における身体と自我の快適さを基準に決めることなのである。

人間はもともと動物でありながら、その自我は動物とは異なり、夢、未来や愛といった現実には存在しない仮想の環境をつくりだしその中で生きている。従って周囲環境とは必ずしも地上の環境だけではない。人間は動物の仲間として地上にある現実の環境を住处としている一方で、人間が自ら作りあげた国家や理想という本人の主観以外には存在しない仮想の環境にも居住している。従って、デュボスが考える「生物とその環境全体との間をつなぐ関係」とは、身体と環境の適応状態、自我と環境の適応状態という2重の環境適応を指す。

このように複雑な環境への適応能力には、周囲との折り合いが大切であり、それには言語コミュニケーションの能力が深く関わっている。口腔保健とは、この言語コミュニケーションを支えるすべての保健医療福祉の技術のことである。人間が持つ環境への適応力の強さは口腔保健が決め手であるといっても言い過ぎではないだろう。

5. 身体と環境の適応

地球上で人間が繁栄している理由は、デュボスが指摘しているように人間のみが「周囲の環境を自分に適応するように変えることを知っていた」からである⁴⁾。環境への適応を選択し行動する人間は、農村を離れ都市を生み出した。都市と農村の大きな違いは、都市は人間の快適さを追い求めて生み出した心地よい人工的な環境であるのに対し、農村は地球環境に人間が服従し隷属しなければならぬ厳しさを持つという点である。従って農村よりも都市のほうがはるかに快適なので、これからも都市への人口の集中は避けられない。しかし、都市には伝染病や公害などの問題が発生している。都市化によって新たに生まれるこのようなマイナス面は都市独自の厳しい規範づくりと適応教育を行うことによって防がなければならないだろう。

6. 自我と仮想環境の適応

身体的存在とは違って、自我はその存在を形で見ることができない。自我はインターネットやメールで空間を瞬間移動することもできる形のない存在である。日本にいながらニューヨークの人と喧嘩もできるし、愛を語ることもできる。従って自我と仮想環境の適応状態を評価することも、その状態を公衆衛生施策で改善することもきわめて難しい。羽仁はその著書『都市の論理』⁵⁾の中で、「コミュニティという概念が目的とするところは、ひとこと言えば、われわれがたのしく生活をするところのできる場所（中略）このコミュニティというところが現実に存在するとすれば、それは都市ではないか」と述べている。羽仁はこの著書の中で都市が当時の厳しい家父長制の家族関係からの解放の場ととらえ、「人間は家族から解放されなければ救われたいのではないか」とも述べている。羽仁のこトバを借りるまでもなく、都市は人間が自由に改造することができる存在である。都市には個人の居場所をつくれるが、農村の家父長制の家族関係の中では個人の居場所がなかったのである。ここでいう「自我と仮想環

境の適応」とは精神生活環境の中に自分の快適な居場所があると感じることに他ならない。

7. 環境の改善

身体と環境の適応、自我と仮想環境の適応という2重の環境適応が健康と幸福の条件であると述べたが、個人が与えられた周囲環境に適応するように努める一方で、公衆衛生や環境情報の専門家は、個人を取り巻く環境を人間の健康と幸福のために改善する努力も必要である。

環境の改善には、3つの異なる対策が必要である。まず、伝染病や暴力、公害、事故防止などの都市対策である。身体の安全が保証でき環境をどのように提供するかを考えなければならない。一つめは、精神的搾取、社会的搾取をさせないことである。具体的には知的な搾取、情報の搾取、性の搾取などである。これまで、幾つか誕生した社会主義社会では、経済的な搾取からの自由だけを偏重して他の自由を抑圧する結果に終わった。知的な搾取、情報の搾取などはとりわけ人々には我慢できないものである。

二つめは「墓制」である。離婚率、非婚率が上昇し核家族すら崩壊した現代都市において、誰が死者を弔うのかが問題になってくる。もともと日本の農村では、血縁関係のある集落の中で大家族制が取り入れられていた。このような社会と家族では死者を弔う行事は華やかに執り行われ、定期的に死者を祭る仏事や神事で自我が復活し、故人の思い出が死後も末永く語り継がれることで、自我の消滅が避けられていた。このような農村の伝統は今日ではほとんど失われ、そもそも死者を祭り続ける大家族制が消滅した。都市では、個人個人は、基本的に無関係であり、おのおの他人に無関心で、自我は常に孤立した状態である。従って、死亡による自我の消滅はすべての世界からの消滅を意味しており、死んだ後には何も残らない。

羽仁は「都市の論理」で家族からの解放を唱えたが、その代償は自我の完全消滅である。そこで、農村における大家族制と同質の「墓制」を都市において創成することが、自我を満足させる施策だ

と思われる。

8. おわりに

口腔保健は、言語コミュニケーションを支えるすべての保健医療福祉の技術である。口腔保健のもう一つの目標である口からの食事もまた摂食を通じた人々の言語コミュニケーションの場の形成を意味するのである。人類の発展は言語コミュニケーションによって、次世代に知識を伝達することによって達成してきた。かつて農村に存在していた大家族制は、言語コミュニケーションの場であり、死後も末永く死者を祭ることによって、先祖から伝わった知識に対する子孫の感謝の念を忘れないための組織であった。今日、都市化と非婚化が進み、世代間の知識の伝達という人間の本質に関わる仕組みが揺らぎ始めている。口腔保健を専門とする我々は、口腔保健が言語コミュニケーションを支え、次世代に知識を伝達する役割を担

い、今日の人類の発展に寄与したことに対する自負を持って、都市化とともに失われた「伝える」コミュニティーを再生させなければならない。なぜなら個人個人が一生をかけて学んだことを次世代に口で話して「伝える」ことがこれまでもこれからも人間存在の本質だからである。

文 献

- 1) 白田 寛, 玉城英彦, 河野公一, WHOの健康定義策定過程と健康概念の変遷について, 日本公衛誌 51: 884-889, 2004.
- 2) R.デュボス, 健康という幻想, 紀伊国屋書店, 1964年
- 3) 生田清美子, 健康観に関する一考察, 日本公衛誌 43: 1005-1008, 1996.
- 4) ルネ・デュボス, 長野 敬, 中村美子共訳, 人間への選択, 生物学的考察, 紀伊国屋書店, 1975年
- 5) 羽仁五郎, 都市の論理, 歴史的闘争—現代の闘争, 勁草書房, 1968年